

育休から学んだこと

だいじょうぶ

我が家にとつて、二〇二五年春は激動の季節でした。昨年、県南でクリニックを開業し、院長として奔走する妻。三月末には第三子誕生、長男の卒園、そして四月には小学校入学。大きなイベントが重なり、どうしようか悩んでいました。というのも、長男が二歳の時から東京へ単身赴任を続けていたのです。物理的な距離ゆえに、家族がどこか分断されていた日々。私たち家族にとつて、長く静かな「夜」のような時間だったのかもしれませんが。だからこそ、私は一年育休を取得し、徳島へ戻る決断をしました。

「明けない夜はない」。育休中、幾度となくこの言葉を噛み締めました。それは単に夜泣きや多忙な日々の終わりを指すだけではなく、離れて暮らした寂しさや、それぞれの場所で抱えていた孤独。そうした家族の「夜」が明け、今ようやく、全員が一つ屋根の下で、揃って「朝」を迎えられました。

ただ、実際の「朝」はドタバタの連続。三歳の長女はたまに会うおじさんで「ママがいい！」と言われ続け、毎日の会話とコンビニでなんとか「パパ大好き！」へと。妻にかわり育児や家事をするものなかなか思い通りにいかず、夕方、長男をお迎えに行けば、後部座席から「遅い！」と言われ。さらに、宿題を見れば「そうじゃない！」とダメ出しを食らう日々でした。しかし、育休を通して、単身赴任で培えなかった時間を取り戻すかのように、じっくり向き合い、新たな絆を築く余裕が生まれました。子育てにはむいていないと決めつけ、仕事一筋でしたが、この一年で得たワークライフバランスの視点は私の価値観を大きく変えるものでした。

「だいじょうぶ」気がつけば、この一言を私はよく娘に投げかけている。

入学して小学校生活にも慣れはじめたある五月の朝。娘は制服の帽子を被り忘れたまま家を出てしまった。そんな娘に私の口からは、「大丈夫」と一人言のようにこぼれていた。この音にすればたった五つの音がチクリチクリと娘の心に刺さっていたようだ。娘は下校後車に乗るなり、学校での担任の先生とのやりとりを話してくれた。娘が先生に帽子を忘れたことを告げると「大丈夫」の言葉が返ってきたそう。この言葉に娘の目には涙が溢れた。この涙は傷心の涙ではなく安堵の涙であった。娘の話を聴きながら、私の目にはその場の光景が写し出されていた。先生からのその一言には「心配はいらない」「そんな時もある」そんな想いがこもっているのを娘は感じとったのだろう。

私の発した「大丈夫」と先生からの「大丈夫」ここに書いてみればどちらも同じ言葉だが発する人間の心一つで全く別の性質をもつようになる。当たり前のことだが大切なこと程日々の営みの中で忘れてしまいがちだ。殊に身近な相手に対しては。人に対する言葉に限らず自分自身に対しても、心を締めつけるような言葉を投げかけてはいないだろうか。等々と考えを巡らせる契機となるある五月の一日の出来事であった。

等といっても先程も書かせていただいたように記憶や想いは薄れゆくものでして。こうして拙いながらも「ほほえみ」誌の執筆を通して思いを核ませていただけること感謝いたします。

徳島の魅力

徳島に引越してきて丸四年が経過した。

引越してきた当初は知らない土地での生活に不安が多く、街の様子や人の話し方一つひとつが新鮮に感じられたことを覚えていた。しかし今では徳島の魅力にすっかり心を奪われている。

最大の魅力は何と言っても阿波踊りだ。

阿波踊りの動き自体はシンプルだが、姿勢、足さばき、手の角度、表情などで個性や技量がはつきり表れる。長年踊っている人ほど「粹」や「色気」がにじみ出る奥深さがあると感じる。そして若い世代が主体となって受け継いでいることは、阿波踊りの大きな魅力の一つである。世代交代が進んでも祭りが生き生きしているのは、若い人たちが「やらされている」のではなく、「楽しめたいから続けたい」と思って踊っているからこそだと考える。その姿が、阿波踊りの未来を感じさせ、見る側にも力を与えてくれる。

また当初は子どもが慣れない徳島の環境に適應できるか不安であった。しかし今となつては、子どもなりに大切な人や大好きな場所が増え、周囲とのつながりがかけがえのないものになっていくと感ずる。

徳島で得た家族や友人、地域社会との関わり、本物の自然の中での様々な体験は、子どもの人生の宝物になるに違いない。友人と流暢な阿波弁で話す子どものキラキラした瞳に羨ましさを感じ

る。豊かな自然、熱い祭り、大切な人たち。すべてが揃う徳島での暮らしの満足度は高い。「なににもない」といったフレーズをよく耳にするが私は「何もなし」ではなく「大切なものが全部ある」、そんな場所だと思っている。

我が子への想い

四十歳を目前にし、人生の折り返し地点に立った今、私の心に浮かぶのは「感謝」という言葉です。今は亡き祖父母から、幼い頃に戦争の話を聞いて育ちました。大正生まれで大学を卒業した祖父は、教員になる夢を抱いていましたが、兄を戦争で亡くし、その夢を諦めて家業を継ぎました。「勉強ができる事は、本当に有り難い事だ。」祖父の言葉は、今も私の心に深く残っています。「生きていく」という当たり前の事。しかし、今なお世界のどこかで争いが続いている現実を思うと、その尊さを痛感します。子供達には、文理小学校で「自立協同」の建学精神のもと学べる環境がある事、支えてくださる先生方や友達、周囲の方々への感謝を忘れず育ってほしいと願っています。

生後七日でICUに入院し、その後も入院を繰り返した我が子に、困難に負けず強く生きてほしい一心で、私は厳しく接してきました。愛しい寝顔を見ながら、後悔に胸が締めつけられた夜もあります。思い返すと、必要だったのは厳しさではなく、信じて見守る事でした。

人生には喜びも苦しみもあります。世界は大変広く、他人と比べる必要は全くありません。当たり前の事など、ひとつもないのです。どうか周りへの感謝を忘れず、自分らしく、大きな夢にむかって歩んでください。そのままのあなたで、百点満点。忘れな

いで。どんな時も、母はあなた達の味方です。生まれてきてくれて、心から感謝しています。ありがとう。

蟻

これからも娘たちとともに

春先の雨上がりのある日、草抜きのためにスコップで庭の土を少し深めにすくうと白い層がでてきた。蟻もわらわら出てきた。巢を掘り起こしてしまつたのだ。白い層はたくさんの卵だつた。

すぐに再び潜っていく蟻、状況を把握しようとしているかのようになりうろろしている蟻、卵を運ぶ蟻。そのうち卵を地表に少し残したまま蟻は一匹も見えなくなった。一瞬見捨てられたのかと思つたが、しばらくするとひとつ残らず卵も片づけられ、地表は何事もなかつたかのように静けさを取り戻した。ちょうど帰省していた長男から蟻の役割分担について教えてもらい、彼らの日常を壊した申し訳なさはもちろんだが、その組織化された社会性昆虫としての本能、危機管理能力の高さに考えさせられた。

今や大学生の長女が生まれてすぐ、弱い地震があつた。大した規模でもなかつたが、目の前の守るべき命の存在を強烈に感じ、背筋が寒くなつたことを今でも覚えていられる。場数を踏んでいても状況により一歩が遅れる。何か突拍子もないことに直面した時、果たして子供達は蟻たちのように動けるだろうか。頭が真っ白になつてしまつたら、まずは機械的に行動してみるのもいい。そのうち、それまでに得た知識や経験を生かし始め、徐々に建設的な思考へと自身を導くことができるようになってくれたら、と思う。常を知らなければ非常を知り得ない。そのための今の毎日だ。

ちなみにその日は三か所程、同様に蟻の卵を地表にさらしてしまつた。どの巢も見事な戻り方であつた。蟻たちが根に持つことなく、平穩に過ごしていることを願っている。

私にはふたりの娘がおり、共に努力家だ。いつも笑顔を絶やさず、家の中も常に明るい。皆さんのお子さんにもたくさんの素晴らしい長所がおりだと思う。

現在三年生の次女はムードメーカーで、いつも家族を楽しみ気持ちにしてくれる。幼い頃に病気があり、いろいろな制限がある時期もあつたが、担当医師のご尽力により今ではすっかり元気になり、運動が大好きだ。週末はランニングマシーンを使って走り、家の中の四メートル程あるボルダリングをいとも簡単に登つてしまう。このようなことが何の心配もなくできるといふことに、本当に感謝しかない。他には学校で借りてくる本が大好きで、毎日様々なジャンルの本を楽しんでいる。中学一年生の長女は、クラスメイトと切磋琢磨しながら勉強に励んだり、水泳やピアノにも打ち込んでいられる。ふたりとも何事にも一生懸命取り組み、私たち夫婦も活力をもらつている。彼女たちの夢は、次女は大好きなディズニリーゾートのアトラクションの開発、長女は医師になることだ。夢を叶えるためには大変な努力が必要となるが、今のよう地道に頑張っていけば、必ず道は拓けると信じている。

文理小学校では日々の授業や生活でお世話になつてはいるだけでなく、中学校からハイペースで行われる授業を乗り越えるための自主学習の基礎も自然と身につくようにご指導いただき、娘たちの大きな力となっている。この場をお借りして、先生方には深く感謝申し上げます。私たち夫婦も大切なふたりの娘を支えるべく、たゆまぬ努力を続けていこうと思う。

子離れできない私の子育て雑感

変化の時期に

『最後とは知らぬ最後が過ぎていく その連続と思う子育て』
最近出会った、俵万智さんの短歌だ（『未来のサイズ』収載）。

この句を読み、ふと長男がまだ私の腰の辺りだった頃を思い出し、不安になった。長男は中学生。今でもキャッチボールはやるものの、お風呂に入れたり、服を着せたり、歯を磨いたりしたのはもうずいぶん前のことだ。恐らく最後などとは意識せずに最後の歯磨きをしたのだろう。

長女もこの頃随分「おませさん」になってきて、私よりは妻と趣味が合うようになり、一緒に何かをすることが減ってきた（洋服やグッズを買い求める時は何故か私が連れて行かれるが）。なんだか長男よりも早い気がして、ほんの少しの寂寥感を覚えつつ、しかし女の子を育てるといふのは案外こういうことかもしれない、とレジでグッズの支払いをしながら妙に納得する自分もいる。ただ近い将来、巷で決まり事のように言われている「パパは臭い」「洗濯物は分けて」「パパの後はお風呂のお湯を入れ替えろ」などと言いつつ、果たしてうちの娘にも来るのだろうか？いやうちの娘に限ってそんな筈は…と妄想が膨らみ、夜は洪柿石けんて我が身をゴシゴシ洗うのだ。一心不乱に。

しかし現実はそのなにごとにも承知している。洋服やグッズを買わされる行事は今後も続くとして、やがて訪れるであろう親離れに備え、見納めかもしれない我が子とのキラキラした思い出だけは大切にしたいものだ、と親父は、テレビの中で踊り狂うアイドルを食い入るように妻と見ている愛娘の、小さな背中を見て思うのである。

小学校に入学した頃、息子は保育園からの大きな環境の変化に戸惑っていました。本来は社交的な性格ですが、緊張した表情が一月ほど続き「話す子はいるけれど友達はいない」「学校をやめようかな」と口にしたこともあります。いわゆる「小一の壁」なのだろうと思いつつ、親として少し身構えた記憶があります。その後、五月頃からは自然と楽しそうに通うようになり、気づけばその出来事も過去のものになっていました。

今思えば、あの時期は何かにつかつたというより、新しい環境に自分を合わせるために力を使っていたのだと思います。

この冬、息子は十歳の誕生日を迎えました。冬休みの間「〇〇はいま何してるのかな」「ここ、△△と一緒に来たら楽しそうやな」「あと二日で学校が始まる。話すことがいっぱいある」と、友達の名前をよく口にしていました。出来事を「話したい相手」として、はつきりと友達を思い浮かべていることが伝わってきました。

学年が進むにつれ、子どもの成長についてさまざまな言葉を耳にするようになりました。振り返ると、「〇の壁」と言われるものは、困難というより、社会とのつながり方が少しずつ変わっていく時期なのかもしれません。どうやら巷では、これから先もさまざまな「壁」が予告されているようですが、それもまた成長に伴う変化なのだと思います。同じ変化でも、小一の頃は身を守る方向に、今は世界を広げる方向に使われています。そんな姿を、この一年の記憶として静かに残しておきたいと思っています。

瓢箪（ひょうたん）

我が家の子供たちを見ていると気合いは入っている時もあるが、根性が無いと感じることが多々ある。例えば、家族で旅行に出かけた際に歩いて観光していると、すぐに「休憩しよう」、「喉が渴いた」、挙句には「腰が痛い」などと言ってくる。三回言ってきたら三回とも「我慢しろ」と言っただけの様子を見るのが、いつものやり取りである。

「気合」と「根性」という言葉を聞かなくなつて久しいが、おそらく今後「ほほえみ」の紙面でも二度と登場しないこの二つの言葉は、かつて日本では人を奮い立たせるための美德として重んじられてきたように思う。限界を超えるための精神力、苦しい状況に耐え抜く力は近年、その価値観が次第に見直され減少している。気合や根性に頼るだけでは心身をすり減らすだけで、長期的な成長や持続的な成果にはつながらないことが明らかになつてきたのだろう。

気合と根性に代わるものとして思い出したのが昔、茶会で見た「瓢自画賛」の掛け軸である。これは大徳寺第四百三十五世・大綱和尚（禅僧）が自身の悟りや教えを瓢箪（ひょうたん）の姿を通して表現したものである。瓢箪は瓜としての実用は乏しいが、軽く無欲な性質なので仙人や人に愛され、酒器として楽しまれてきた。また智・仁・勇を備える存在ともされている。重要なのは最後の一文で、「うかうかと暮らすようでも瓢箪の胸のあたりに締めくくりあり」すなわち「覚悟」を持って生きよと瓢箪が問いかけてくるのである。冷静かつ持続的に志を持ち、時には変化することも厭わない精神性。この文章を書きながら家族旅行には必要無いと思つた。

親と子、共に成長する

子供が徳島文理小学校に入学してからの五年で、心身ともにたくましく成長しました。先生方や友達との出会い、日々の授業や学校行事を通じて、多くのことを学び、経験を重ねてきました。幼さが薄れる寂しさを感じつつも、伸び育つたことを喜んでいきます。

私は、中学入学を控える十二歳が家族という安全な枠から一歩踏み出し、自分自身の価値観を確立し始める一つの区切りだと考えています。中学生になれば、親の庇護下にある子供ではなく、一人の人間として社会と関わる機会も増えてゆくでしょう。自分の考えを持ち、親の庇護のもとから飛び出し、自分の世界を広げていって欲しいと願っています。

もちろん、社会の荒波の中でつまづくこともあるでしょう。しかし、その経験こそが自立心を育む糧になります。私たち親の役割も、「教えてあげる」立場から「一緒に考える」立場へと変わつてゆく必要があると思います。「一緒に考える」とは、先回りして答えを与えるのではなく、子供自身の気づきと選択を尊重し、時には静かに見守る覚悟を持つことです。共に人生の困難を考察し、道筋を示す指針となること。それが、今後の私たちが果たすべき大切な役割だと信じています。

残りの小学校生活、そしてその先の長い道においても、徳島文理小学校で得た確かな学びを胸に、自信を持って自分の道を進めるよう、精一杯応援を続けたいと思つています。

菊花の約

もうすぐ卒業を迎える長男の小学校入学は、コロナ禍真っ只中の二〇二〇年四月。保護者同士の交流も少なく、子ども同士で集まる機会もほとんどない、静かな学校生活の始まりでした。

そのような日々が続く中、コロナ禍も少し落ち着きを見せた三年生の冬、初めて子供が「明日、山城公園で友達と遊ぶ約束をした」と嬉しそうにはなしました。半信半疑の私は「送っていくよ」と答えたものの、翌朝目を覚ますと、徳島では珍しい雪。私は「極寒や、これでは誰も来んよ」と伝えましたが、子どもは真っ直ぐな目で「絶対来る、約束したもん」と。根負けして向かった山城公園、約束の十分前に到着。やはり誰の姿もなく、私は「きっと誰も来んよな、どう励まそうかな」と考え続けていました。しかし、ガタガタ震えながら公園に入って五分後、「おい」という甲高い声。数人の友達が、雪の積もった芝生の上を走ってきたのです。私はその姿に胸がいっぱいになりました。子どもたちの間に息づいていたのは、まるで『菊花の約』のような、誠実で揺るがぬ信義。そうだった、子どもたちの約束って、約束を守るうとする気持ちには、こんなにもまっすぐで、力強いものだった。子どもたちの約束には、大人の想像を超える誠実さと力があることを、私はすっかり忘れていました。自分の幼い頃を思い出しながら、雪の中、子どもたちの姿にこっそり涙しました。その涙はとても温かかったのを、今でも覚えています。

コロナ禍に始まった不確かな時の中で、友情を育み、成長してきた六年間。そんな大切な仲間と出会えた日々に、心から感謝しています。

緊急事態宣言を経験して

新しいお友達も加わって、これから楽しい学校生活のスタートと張り切った矢先の、コロナによる緊急事態宣言でした。本来なら外の世界に触れ、多様な価値観を築く大切な時期に、親も子供も人との関わりを極力避ける日々。今では想像しにくいことです。が友達と遊ぶ約束をすることさえ慎重だった、重苦しい日々を思い出します。やっとマスクをはずせた日の解放感は何となく格別でした。

感染症を過度に気にせず生活できるようになった現在、娘に「今までで一番楽しかった時間はいつだったの。」と尋ねてみたところ、祖母の実家で大勢の再従兄弟と一緒にワイワイと過ごした芋掘りの時間が一番と、話してくれました。制限の多い時代を経験したからこそ、子供なりに人と人が集い、自然の中で同じ時間を共有することの大切さを感じ取っているのかもしれない。

これから迎える思春期は、友達関係で傷ついたり、傷つけられたい、もう誰とも話したくないという気持ちになる事が有るかもしれない。そんな時、やなせたかしさんの育ての親の言葉、「人生は喜ばせごっこ」という考え方が役立つ様に思います。自分を大切にすることは大事ですが、自分軸を持ちつつ他の人を励ましたり、違いを理解したり、人の痛みが分かる人に育って欲しいと思います。

制限だらけの大変な中、子ども達を温かく見守り、ご指導くださいました先生方、そして関係者の皆様は、心より感謝申し上げます。皆様のこれからの学校生活が、ますます素敵なものとなりますよう心から応援しております。